

国民国家における巡礼—インドネシア人と宗教

弘末 雅士（立教大学文学部教授）

Pilgrimage in Indonesia: Its Nation State and the Principle of One Lordship

Masashi HIROSUE

Professor, Faculty of Arts, Rikkyo University

A nation state develops bureaucratic networks and school systems within its territory. In *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Benedict Anderson points out that the "pilgrimage" that public servants and school students made towards the capital, the apex of their looping flight from their starting point, played a significant role in the emergence of national consciousness. This then led to a clarification of the origin of the nation state after the demise of the religious community and the dynastic realm, caused by the rise of print-capitalism. As a result, the capital becomes a holy center for the nation.

Present-day Indonesia, which is based on the framework created by the former Dutch East Indies, consists of various religious groups. Thus, religious issues became important for the national integration. The Constitution states that the State is based on the principle of One Lordship that includes Islam, Protestantism, Catholicism, Hindu, Buddhism and Confucianism. Although there are some Indonesian Muslims who claim that Muslims should, to a stricter degree, adhere to the Islamic law and believe that secularization and Westernization are undermining their religious lives, these Muslims do not deny the framework of the nation state. Even the pilgrimage to Mecca or studying in the Middle East rather helps them to reaffirm the relationship between Islam and their national identity than to dissolve it. Thus, the "pilgrimage" to the nation center induces them to tightly combine their nationality with their religion.

はじめに

国民国家は、首都を中心として官僚制度と学校制度のネットワークを領域内に張り巡らす。官僚や就学者は、出身地から県や州の中心地を経て首都へ向かう、らせん階段を巡ることになる。『想像の共同体』の著者ベネディクト・アンダーソンは、こうした動きを「役人の巡礼」および学校制度の生み出した「巡礼の旅」と呼んだ。そうした「巡礼」と出版資本主義が、旧来の宗教共同体や前近代の王国に代わり、新しい国民意識を生み出したことをアンダーソンは指摘する〔アンダーソン 1997〕。これを受けて近代政治史研究者の間では、この動きを首都への「巡礼」の語で表現する者が少なくない。国民国家にとって首都は、中心的聖地となる。そこを拠点に国家や宗教がどのように観念されているか検討することは、宗教的聖地への巡礼と比較する上で、貴重な材料を提供してくれるように思われる。

1 国民国家の神話

現在のインドネシア共和国は、オランダ領東インドを基盤としている（図1）。この領域内に300前後の異なる言語グループが存在し、植民地支配に服する以前、この領域をカバーする王国はなかった。したがってオランダ支配からの独立を掲げた「インドネシア」の枠組みは、人々にとり偶然の産物であった。しかし、インドネシア民族主義者の多くは、この枠組みがかつてのマジャパヒト王国（1293年～16世紀前半）の勢力圏とほぼ重なりとみなし、必然的な祖国と観念した。独立後インドネシアは、マジャパヒト時代の宗教書

のなかの一節「異なれど本質は一つなり (Bhinneka Tunggal Ika)」を、「多様性の中の統一」の意味に解釈して国是としている。

新生国民国家をあるべき本来の姿とみなすことは、近現代の「神話」ともいえる。それは、インドネシア共和国の宗教政策にも表れているように思われる。今日のインドネシアは憲法の前文で「唯一神への信仰」を、人道主義、インドネシアの統一、民主主義、社会正義とともに、建国原則の一つとして掲げている。この「唯一神への信仰」を奉ずる宗教として、イスラーム、プロテスタンティズム、カトリシズム、ヒンドゥー、仏教、儒教が、現在公認されている。インドネシアは1945年8月17日に独立を宣言したが、その過程で住民の大多数がムスリムであるため、イスラーム国家とするか、世俗国家とするかが議論となった。初代大統領となるスカルノは、他宗教にも配慮して諸宗教を統合するために、「唯一神への信仰」を建国原則として採用した〔土屋1994: 276-277; Eka Darmaputera 1988: 150-156〕。神は全知全能で唯一であるが、それに到達する方法が複数あると唱えたのである。

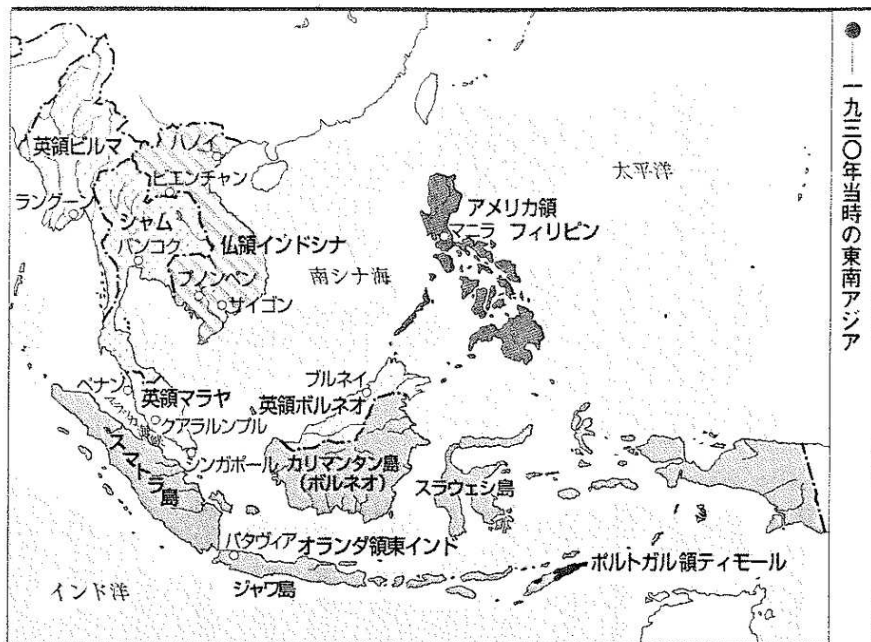


図1

こうした宗教観念がいかに形成されてきたか、歴史的に検討してみたい。「異なれど本質は一つなり (Bhinneka Tunggal Ika)」は、元来ヒンドゥー王国マジャパヒト時代の『スタソーマ』(14世紀)に登場する一節であった。ヒンドゥー教徒と仏教徒が混在したマジャパヒト王国で、密教信仰の立場からシヴァとブッダは姿が「異なれど本質は一つなり」と唱えて、社会統合がはかられたのである〔青山1997: 129〕。

その後ジャワではイスラームが受容され、マジャパヒト王国も16世紀前半に姿を消した。ジャワや東南アジア島嶼部でのイスラーム受容において、イスラーム神秘主義は重要な役割を担った。イスラームは、13世紀終わり以降徐々に島嶼部に広まり始めた。精霊信仰を基盤にヒンドゥー教や仏教を受容してきたインドネシアにおいて、イスラーム神秘主義者は、多様な在来信仰を絶対的神アラーのもとに統合することをこころみた。ジャワでは瞑想により個を滅却し、神との合一をはかる信仰が盛んになった。その過程で、諸存在の力の源は同質であるという観念が形成され、それらの力を合わせた究極的存在に至ることが重視された〔Woodward 1998; Anderson 1972〕。

こうしたジャワ人の思考に、加えて影響を与えたのが、神智学思想であった。1875年にニューヨークでエレナ・ブラヴァツキーとヘンリー・オルコットによって、降霊術を重視し東西宗教の総合を説いて設立されたこの協会は、19世紀終わりから20世紀にかけてオランダ領東インドの欧亜混血者や原住民エリートの間で、多くの信奉者を獲得した。オランダ語教育を受け、ジャワの女性運動の先駆者となったカルティニは、友人のオランダ人女性にあてた手紙で、人類は兄弟、諸宗教は究極的に同じと述べている〔永積1980: 90〕。また東インドで最初の独立を唱えた「東インド党」のリーダーの欧亜混血者ダウウェス・デッケルや、スカルノもこの教えの影響を強く受けた。彼らは東インドの諸勢力の結集を重視した〔Bosma and Raben 2008: 293-343〕。

2 インドネシア民族主義の展開

インドネシアの原型となる東インドの独立を最初に唱えたのは、上述した欧亜混血者や彼らと交流した原住民有識者であった。19世紀後半になると交通手段の発展により、オランダ人らヨーロッパ人が東インドに数多く来航し始めた。本国出身者の増加により、欧亜混血者たちはそれまでの職を彼らに奪われた。これに対し、1880年代より欧亜混血者の相互扶助団体が生まれ、彼らの間で東インドを祖国とみなす観念が台頭した〔ブルンベルヘル 1939: 63-70; Bosma and Raben 2008: 301-302〕。それが典型的に表れたのが、1912年に結成された上の東インド党である。東インド党は、「東インド人」による独立国家の形成を唱えた。原住民であろうが、ヨーロッパ人や華人系住民であろうが、東インドを祖国とみなす人ならば、誰でも「東インド人」になれるとされた。

また同じ頃、原住民の間からも政治運動が起こった。1911年の辛亥革命の成功に高揚した東インドの華人に対抗して、同年末原住民の物心両面の向上を唱えたイスラーム同盟が誕生した。同盟は短期間でジャワ島各地に会員を獲得し、1913年の前半に会員は30万人にふくれあがった。こうしたなか東インド党は、イスラーム同盟に接近した。オランダ政府は、東インド党の活動が植民地秩序を乱す恐れがあると判断し、党のリーダーたちを国外追放処分にした〔深見 1996〕。東インド党は瓦解した。これに対し、当時中部ジャワのスマランで、原住民とともに鉄道の労働組合運動を展開していたヨーロッパ人の社会主義者たちは、1914年東インド社会民主主義協会を設立した。リーダーたちは、協会の原住民のメンバーをイスラーム同盟に加盟させた。

オランダは、ヨーロッパ人の社会主義運動を厳しく弾圧した。ヨーロッパ人指導者の多くが国外追放となった。その結果、協会の主導権は原住民の手に移り、彼らは1920年東インド共産主義者同盟を結成した。当時のメンバーはほとんどがムスリムで、彼らは社会主義がイスラームの教えを20世紀に具現した思想ととらえる者が少なくなかった〔ハッタ 1992: 95-96〕。1924年にインドネシア共産党と改名した同盟は、1926～27年に武装蜂起した。しかし蜂起はオランダの弾圧を受け、共産党は解党させられた。

民族主義運動は、その後高等教育を受けた原住民エリート達によって継続された。1928年にスカルノがインドネシア国民党を設立し、インドネシア独立を唱えた。オランダはインドネシア民族主義運動に厳しい姿勢で臨み、国民党は1931年に解散させられた。スカルノは1933年にオランダに逮捕され、独立後に副大統領を務めるハッタも翌34年に逮捕され、ともに流刑に処せられた。1930年代中葉以降、オランダと協調する組織しか活動が認められなくなった。

他方イスラーム勢力に対してオランダは、反植民地主義を掲げない限り、その宗教生活に不干渉の政策を採った。しかしオランダは、増加しつつあったヨーロッパ人女性とムスリム原住民男性との結婚に対し、ヨーロッパ人女性の保護のため、一夫一妻制ならびにムスリム役人を介さず市民登録による婚姻成立を認める改正案を、1937年に導入しようとした。ムスリムの宗教生活にまで植民地政策が及んでくることに、彼らの不満が高まった。彼らはムスリムの大同団結をとなえ、インドネシア・イスラーム会議(MIAI)を結成した。イスラーム勢力の予想を超える反発を受けたオランダは、翌年婚姻法案を撤回した〔弘末 2016: 26-29〕。

3 国民統合と宗教

その後1942年から45年まで、インドネシアは日本軍の占領時代を体験した。オランダ支配下で弾圧されたスカルノやハッタら民族主義運動の指導者は、日本占領下で軍政への協力を求められた。また日本軍は、連合国と対抗するためイスラーム勢力に期待し、インドネシア・イスラーム会議を1943年マシュミとして再組織させた。さらにムスリム青年層の間で「回教挺身隊」を形成し、軍事訓練を施した。イスラーム勢力は、日本軍政下で勢力を拡大した。1945年には日本占領下で、インドネシア独立が協議され始めた。同年6月の独立準備調査会でイスラーム国家か世俗国家かが議論されたとき、上述のようにスカルノは、イスラームならびに他宗教に配慮して、それらを包摂する「唯一神への信仰」を掲げた。こうして同年8月18日に制定された憲法の前文に、それが掲げられるに至ったのである。

インドネシアは独立宣言ののち、これを認めないオランダとの間で1945年～49年に独立戦争を戦った。1949年12月、オランダはインドネシア連邦共和国に正式に主権を委譲した。翌50年インドネシア連邦共和国は、インドネシア共和国となった。1952年インドネシアは、イスラーム、プロテスタンティズム、カトリシズム、その他の宗教(バリ・ヒンドゥーなど)が、公認宗教として認められた。他方この間、イスラ

ム国家建設を試みる運動が、西ジャワ（1949年）、南スラウェシ（1951年）、アチェ（1953年）で起こった。しかし、いずれも実現しなかった。



図2

スカルノは、植民地時代のバタヴィア（ジャカルタ）中央部の「国王の広場」を「独立広場」と改称し、そこに137メートルの独立記念塔を設立した（図2）。スカルノはさらに、独立広場の周辺に植民地時代から存在するカトリック教会（図3）とプロテスタント教会を国立の教会とし、独立広場東北部に「独立モスク」を意味する国立のイスティクラール・モスク（図4）の建設にかかった。諸宗教が「唯一神への信仰」のもとに統合されていることを示そうとした。1958年に、イスラーム、プロテスタンティズム、カトリシズム、ヒンドゥー、他の宗教とクバティナン（イスラーム神秘主義の影響をうけたジャワの瞑想を重んじる宗教信仰）が公認宗教とされ、67年には上記のヒンドゥーがヒンドゥー・仏教とされた。国家が多様な宗教を取り込み、コントロールしようとしたのである。

インドネシアの宗教状況が変化してくるのは、1965年にスカルノが失脚したあとのスハルト体制時代である。外資を積極的に導入してスハルト独裁下で実施された開発経済政策により、インドネシア社会は少なからぬ変容を体験した。工業化が推し進められ、第一次産業以外の就業者が大幅に増加した。インドネシアのGNPも増大し、高等教育機関への進学率も上昇した。しかし、従来以上に欧米的価値観が流入し、世俗化が進行していくなかで、宗教的規範を生活に採り入れてきたムスリムの間に、不満が醸成された。1970年代後半より、包括的なイスラーム法（シャリア）の遵守とイスラーム国家の樹立をめざす「イスラーム主義」運動が、インドネシアで台頭した〔見市 2004： 18-20〕。大学生の間で展開し始めたこの運動は、1980年代には影響力を拡大した。これに対しインドネシア政府も、1991年に公立学校におけるジルバブ（スカーフ）の着用を認め、またスハルトもメッカ巡礼を行うなど、彼自身が敬虔なムスリムであることを示そうとした〔倉沢 2006： 128-129〕。



図3



図4

アジア通貨危機による社会混乱のなかで、スハルトは1998年退陣した。それとともに、インドネシア各地で国民統合への不満や宗教対立が表面化した。また2001年の9.11事件以降のアメリカのアフガンやイラクへの軍事介入に、インドネシアのムスリムの間から強い反発が生じた。2002年にはバリ島で欧米人観光客を狙った爆弾テロが、2003年にはジャカルタのアメリカ系資本のホテル爆破事件が起こった。こうした事件を起こしたイスラーム急進派ジェマー・イスラミヤのメンバーのなかには、マレーシアやフィリピンのムスリムと接触し、さらにアルカイダのメンバーと交流を持ち、アフガニスタンで軍事訓練を受けたものも存在した〔見市 2004： 25-58〕。

ただし、彼らイスラーム急進派も、インドネシア社会をイスラーム主義にもとづき刷新することを目指しており、インドネシアの国家枠組みの変更をもくろんでいるわけではない。多くのムスリムは、「唯一神へ

の信仰」を掲げる国是のもとで、個人から家族さらに社会のイスラーム化を進め、最終的にイスラーム国家にすることを志向している。なおメッカ巡礼やエジプト留学に赴くインドネシア人も、少なくない。メッカ巡礼やエジプト留学は、ムスリムとしての意識を高めるが、イスラームと国民国家の関係を否定するのではなく、むしろ両者の関係を再確認させている[Laffan 2003; 小林2008: 230]。またインドネシアとマレーシアのムスリムはしばしば交流するが、彼らの間からインドネシアとマレーシアを合わせたイスラーム国家建設の試みは、ほとんど聞かれない。

かつてインドネシアでは国家が宗教をコントロールしていたのに対し、現在は宗教が国民統合に影響力を及ぼしている。スハルト退陣直後に華人系住民の焼き討ち事件を起こしたインドネシアは、華人系住民との融和をはかり、2006年には儒教も公認宗教とした。現在、華人系住民の間で文廟参拝が、以前にも増して盛んになっている。また華人系住民の仏教寺院における活動も、活性化している。今日インドネシアの華人系住民のほとんどは、インドネシア国民の意識をもつ。また海岸部のムスリムとしばしば確執を有してきたカリマンタン中央部に住むダヤク人は、彼らがキリスト教を受容する以前から信奉してきた精霊信仰を再評価し、他のインドネシア人も包摂しうる「インドネシアの宗教」と唱えている[相澤2015]。未だ公認されているわけではないが、「インドネシアの宗教」を掲げることで、彼らの先住民としての正統性を主張しているのである。

おわりに

国民国家は、首都を中心に領域内に巡礼網を形成する。そのネットワークは、出版資本主義にも支えられ、現在のインドネシアやその周辺国を見るかぎり、きわめて強い。広域秩序原理の宗教も、必ずしも国民国家の枠組みを否定せず、むしろ両者は相互媒介的な関係にある。首都を目指す「巡礼」がもたらした、凝集力といえよう。

なお今日の東南アジア諸国の枠組みも、歴史的な産物である。かつて一介の港市にすぎなかったマラッカやシンガポールが、東西世界とネットワークを形成することで、近世東南アジア国家群を台頭させ、またのちの国民国家の母体となる近代植民地体制を構築した。そうした新しい都市の出現は、現在の国民国家の枠組みを変容させるかもしれない。それは同時に、新たな巡礼地の誕生とも関わり、新しいネットワークを生み出すのである。

参考文献

- ・相澤里沙 2015 「ヒンドゥーから「祖先の宗教」へ：中央カリマンタン州における宗教的マイノリティの地位確立運動」（公益財団法人東洋文庫東南アジア研究班2015年度研究会）。
- ・青山亨 1997 「古代ジャワ社会における自己と他者」（辛島昇・高山博編『地域の世界史2 地域のイメージ』、山川出版社、所収）。
- ・Anderson, B. R. O'G. 1972 "The Idea of Power in Javanese Culture, in *Culture and Politics in Indonesia*, edited by C. Holt, Ithaca and London.
- ・アンダーソン、ベネディクト 1997 『増補創造の共同体—ナショナリズムの起源と流行』（白石さや・白石隆訳）NTT出版。
- ・ブルンベルヘル、ペトロス 1939 『オランダ領東インドにおける印欧人の運動』（深見純生訳、『総合研究所紀要』第22巻、1号、1996年9月、所収）。
- ・Bosma, U. and Raben, R. 2008 *Being "Dutch" in the Indies: A History of Creolisation and Empire, 1500-1920*, Singapore and Athens.
- ・Eka Darmaputera 1988 *Pancasila and the Search for Identity and Modernity in Indonesian Society: A Cultural and Ethical Analysis*, Leiden, New York, Copenhagen and Köln.
- ・弘末雅士 2003 『東南アジアの建国神話』、山川出版社。
- ・弘末雅士 2016 「近代インドネシアにおける民族主義運動の展開と「混血婚」—ニヤイと欧亜混血者の陰」（水井万里子・伏見岳志・太田淳・松井洋子・杉浦末樹編『女性から描く世界史—17～20世紀への新しいアプローチ』、勉誠出版、所収）。
- ・深見純生 1996 「1913年のインドネシア—東インド党指導者国外追放の社会的背景」『東南アジア研究』

34 卷 1 号。

- ・片山善雄 2016 『テロリズムと現在の安全保障—テロ対策と民主主義』亜紀書房。
- ・倉沢愛子 2006 『インドネシア イスラームの覚醒』洋泉社。
- ・小林寧子 2008 『インドネシア 展開するイスラーム』名古屋大学出版会。
- ・Laffan 2003 *Islamic Nationhood and Colonial Indonesia: The Umma Below the Winds*, London.
- ・見市建 2004 『インドネシア イスラーム主義のゆくえ』平凡社。
- ・永積昭 1980 『インドネシア民族意識の形成』東京大学出版会。
- ・土屋健治 1994 『インドネシア 思想の系譜』勁草書房。
- ・Woodward, M. R. 1989 *Islam in Java: Normative Piety and Mysticism in the Sultanate of Yogyakarta*, Tucson.